

〈道徳教育〉

生命尊重の心を育て自己の生き方を考える道徳の時間

——心に響く授業の工夫を通して——

那覇市立さつき小学校教諭 仲 宗 根 芳 美

I テーマ設定の理由

情報社会が急速に進展し、子どもたちはパソコンや携帯等を使って、様々な情報を自由に、かつ簡単に手に入れることができる便利な社会になっている。反面、情報ツールが悪用され、いじめや自殺等のサイバー犯罪につながるケースが多発し、大きな社会問題になっている。少年犯罪の粗暴化や低年齢化も顕著になり、歯止めが効かない現状になっているといえる。このことは、自他の生命を尊重する態度や、相手の気持ちや痛みを思いやる感性にも歪みを与えている。学校教育においては、生命尊重の教育をこれまで以上に充実させる必要がある。

小学校学習指導要領第3章道徳の「指導計画の作成と内容の取り扱い」の中で、「各学校においては、各学年を通じて自立心や自律性、自他の生命を尊重する心を育てることに配慮するとともに、児童の発達の段階や特性等を踏まえ、指導内容の重点化を図ること」と示している。また、すべての学校段階において共通する重点として生命尊重をおさえている。

本学級の子どもたちは、入学当初から健康や安全、生命の尊さについて、学習をしてきている。実態調査をしてみると、「命を大切にしなければならない」という質問に対し、「とてもそう思う」が全体の90%あった。その理由として、「命は一つしかない」「たった一つの大切なもの」「命がないと生きられないから」等があった。ほとんどの子が、命は大切であると考えている。また、「友達は大切ですか」「自分や周りの人の命を大事にしていこうと思いますか」の質問でも、ほぼ全員が「とてもそう思う」と答えている。次に、「命を大切にするとどんなことですか」の質問に、「悪口を言わない」「危ないことをしない」「ルールを守る」「仲良くする」等があった。しかし、「友達に対して、言葉や行動に気をつけようと思いますか」の問いになると、「とてもそう思う」が46%、「まあまあ思う」が34%、「あまり思わない」が7%、「まったく思わない」が13%であった。普段の子どもたちの学校生活の様子を観察してみると、仲間はずれにしたり、「死ね」とか「うざい」とか言葉を使ったりする場面、廊下を走る場面をよく見かける。つまり、資料を通して、「命は大切だ」「周りの人の命も大事しよう」と、理解はしている。それは表面的な理解で、子どもたちの内面まで響いていないため、行動として表れてこないのではないかと考える。

これまでの私自身の道徳の授業実践を振り返ると、読み物資料の流れをただ追うだけの授業になり、ねらいとする価値に向けての、深まりのない授業で、子どもたちの心に響くことなく授業が進み、学びが生まれてこなかったのではないかと考える。

道徳の時間において、生命尊重の心を育てるには、児童の内面に迫るような授業、心に響く授業の工夫が重要だと考える。

そこで、道徳の時間が子どもたちの心に響く授業になるように、資料選定から資料の提示、発問の工夫、書く活動等研究を深め、工夫・改善をすることで、子ども一人一人に生命尊重の心を育て、自己の生き方について考えることができるであろうと考え、本テーマを設定した。

〈研究仮説〉

道徳の時間において、「生命尊重」との関連を図り、効果的な資料選定、提示、発問を工夫し、自己を見つめさせるための書く活動を取り入れ、児童の内面に迫るような心に響く授業をすることにより、生命尊重の心を育み、自己の生き方について考えることができるであろう。

Ⅱ 研究内容

1 「生命尊重の心」とは

(1) 「生命尊重の心」について

「命」と「生命」の言葉を、国語辞典で調べてみると、「命」とは、「生物が存在する力」「生きてる期間」「生涯」「ただ一つのよりどころ」「かけがえのない重要なもの」と書かれている。「生命」とは、「いのち、生物が生物として存在できる原動力」「物事がその働きをする言動力」「物事の存在や維持をささえる最も大切なもの」と書かれていた。

「生命を尊重する心」とは、生きることに喜びを見いだし、自らの生命を大切にするとともに、他者の生命も同様に尊重する心情や態度だとしている。また、小学校学習指導要領解説「道徳編」（平成20年3月）（以下、解説「道徳編」と表記）においては、生命尊重について、次のように示している。

低学年・・・生きることを喜び、生命を大切にすることをもち。
 中学年・・・生命の尊さを感じ取り、生命あるものを大切にする。
 高学年・・・生命がかけがえのないものであることを知り、自他の生命を尊重する。

「生命を尊重する心」について理解を深めていくことは、自分自身が存在するためだけではなく、他者や社会との関わりにおいてもよりよい在り方や生き方へとつながると考える。本学級の児童は、中学年であることから、生命の尊さを感じ取り、生命あるものを大切にすることを育て、自己の生き方を考えることができる指導を展開していきたい。

本研究を通して、子どもたちが、自分自身の命を大切に思い、他の命の大切さについても気づき、友達を大切にする、言葉遣いに気をつける、家庭学習を頑張る等、日常生活の中で実践し、生きることの素晴らしさを感じられるような指導をしていきたい。

(2) 発達段階に応じた指導

前文部科学省初等中等教育局教科調査官の永田繁雄(2007)は、「子どもたちの発達と健康に応じて自他の生命を尊重する心を育てる指導の充実を図る必要がある」とし、発達段階に応じた授業の工夫や道徳的实践力の育成についての重要性を述べている。そこで、道徳性や命、死の意識についての発達段階をふまえ、授業作りを行う。

① ピアジェによる道徳性の発達段階

ピアジェによると、発達段階の特徴や道徳的判断の発達段階は、表1のようになる。

表1 ピアジェによる道徳性発達段階

時期	前操作期（6才以前）	具体的操作期（7～11才）	形式的操作期（11才～15才）
発達段階の特徴	言葉の使用が可能となり、その言葉や概念を具体的な事物と関連させて理解する。	自己中心性も脱していく段階で、自分の活動が他者に与える影響を考慮することも可能。社会的な相互作用を理解する基礎が形成される。	自由に概念・知識・イメージを頭の中で操作して創造的活動を行うことが可能になる。抽象的な思考が可能。
道徳的判断の発達	大人の命令や禁止が万能になる。	<目には目を>式の互酬性の道徳が発生する。	その都度の状況を考慮するようになり、相互に許しあうことができるようになる。

② 「子どもの死やいのちの意識」の発達段階

近藤卓(2007)は、子どもたちの「いのちの意識」がどのような発達段階なのか、その段階に応じたプログラムを考えていかなければならないと考え、表2のように示している。

表2 子どもの「いのち」の意識について

いのちの教育の段階1 ～保育園・幼稚園・小学校低学年～	いのちの教育の段階2 ～小学校高学年・中学校～	いのちの教育の段階3 ～高等学校・大学～
自然、家族、動物、植物等とふれあいを深め、それを体感することで、身の回りにあるもののすばらしさを感じ、生きていることの幸せを確認することが課題となる。	いのちや死を見つめることを通して、不安、恐れ、孤独、悲しさ等を体験することが増え、同じように感じている仲間がいることを知り、感情を共有し「棚上げ」を学ぶことが課題となる。	生きることを意味を求め。具体的に自分の存在意識を問い、なぜ、生きているのか、何を目標として生きていくのか、といった現実的な課題が中心となっていく。

③ 内容項目「生命尊重」の指導の観点から

解説「道徳編」においても、価値項目「生命尊重」を指導するにあたって、低学年や中学年高学年では、次のように指導することを目標に掲げている（表3）。

表3 発達段階に応じた「生命尊重」の指導の観点

低学年	中学年	高学年
生活経験の中で生きていることを感じ取ることが中心となる。 「生きている証」を実感し、そのことに喜びを見いだすことによって生命の大切さを自覚できるようにする。	現実性をもって死を理解できる。生命の尊さを感じ得るようにする。自分の生命の尊さに知り、同様に生命あるものすべてを大切にしようとする。	生命の誕生から死に至るまでの過程を理解できる。生命のかけがえのなさを自覚できるようにする。自他の生命を尊重し力強く生き抜こうとする心を育てるとともに、生命への畏敬の念を育てる。

押谷由夫（2005）は、「いじめは、暴力により相手の身体を傷つけるものや言葉や態度により、相手の心や人格を傷つけるものがある。子どもたちは、生物学的な生命として認識が強く、人格的生命として相手の心や人格を傷つけるといったことが、その人の命を傷つけることになるということを理解していないのではないかと述べている。また、いのちを軽んずる行為が後を絶たないことから、「命の教育は、二度と生き返らないという、いのちの絶対性を教えると同時に、人格的生命を大切にすることも教えなくてはならないのではないかと述べている。

小学校の発達段階において、中学年では、現実性をもって死を理解できるとある。

本学級の「命」についてのアンケートでは、「人は死んでもまた生き返ると思いますか」の質問に、「とても思う」が13%、「まあまあ思う」が13%いた。また、「友達に対して、言葉や行動に気をつけようとしていますか」の質問にも、「あまり思わない」「まったく思わない」という児童が19%もいた。このような結果も踏まえて授業を実践していく上で、人格的生命として相手の心や人格を傷つけない、「命」は二度と生き返らないという命の絶対性も意識し指導を展開していきたい。

2 「自己の生き方を考える」について

(1) 「自己の生き方を考える」とは

今回の学習指導要領の改訂において、小学校の道徳では、「自己の生き方についての考えを深める」指導の充実が明記された。「道徳的価値の自覚及び自己の生き方について考えを深め」とし、児童が自己の生き方に結びつけて考えてほしいとの趣旨を重視している。解説「道徳編」によると、「自己の生き方を考える」とは児童が、「日々の生活の中で、自分を振り返り、自分のよさについて考え、自立した生活をつくろうとする。また、受け止めた自分らしさをふまえて、これからの自分に夢や希望をもち、社会的自立に向けてよりよい生き方をしようとする」ことだとし、以下の3つを強く意識して指導することを重要視している（表4）。

表4 自己の生き方について考えを深めるための指導について

- 児童がよりよくなろうとする自分を感じ、自己を肯定的に受け止められるようにする。
- 他者との関わりや身近な集団の中で自分の特徴などを知り、伸ばしたい自己を深く見つめるようにする。
- 現在の生活及び将来の生き方の課題を考え、それを自己の生き方として実現していこうとする思いや願いを深めることができるようにする。

(2) 「自己の生き方を考える」道徳の時間について

自己の生き方を考えることに視点をおくと、書く活動が重要になると考える。学習指導要領「道徳編」では、「書く活動は、児童が自ら考えを深めたり、整理したりする機会として、重要な役割を持つ。」とある。書く活動によって、子どもたちに、自分の考えや思いをまとめさせ、道徳的価値の内面的自覚を促したい。

また、子どもたちが自分の生き方について考える時間でもある必要である。前段の部分で、主人公の生き方について共感したことを書き、対話を通して多様な価値観に出会わせる。後段では、単なる価値観から価値への主体的な自覚へとつなげるために書く作業を行う。書く作業を通して、子ども一人一人に自己を見つめさせ、自己内対話を深めさせたい。

3 心に響く「道徳の授業」の工夫

(1) 心に響く「道徳の授業」とは

心に響く授業とは、どのような授業なのか。平成16～18年度佐倉市教育委員会指定道徳研究校の染

井野小学校においては、平成 20 年度の道徳研究において心に響く授業を表 5 のように示してある。

表 5 心に響く授業の条件（平成 20 年度 千葉県佐倉市立染井野小学校道徳研究資料より一部抜粋）

- ① 児童の考えを再認識したり、新しい考えに気付かせたりする授業。
- ② 児童の心を揺さぶり、それにより道徳的価値に気付き、自覚することができる授業。
- ③ 道徳的価値と自分との具体的なつながりに気付かせる授業。
- ④ 道徳的実践力を育てることができる授業。

心に響く「道徳の授業」とは、道徳の時間で資料や話し合いを通して、子どもたちが心を揺さぶられ、道徳的価値の自覚を深め、これからの生き方への指針を見いだす事ができる授業だと考える。子どもたちは、偉人やヒーローなどの主人公に共感し、あこがれをもち、自分を振り返って見つめなおし、自分もよりよくなろうとし、意欲をもって生きていこうとする。そのためには、教材が児童の心に響くものでなくてはならない。主人公の生き方について深く考え、自己の生き方を見つめる指導の工夫をしていきたい。心に響く「道徳の授業」の工夫として、資料の選定、提示の仕方、発問、書く活動に気をつけていきたい。

（2）心に響く授業の工夫

① 資料の選定

解説「道徳編」の「第 5 章 魅力的な教材の開発や活用」の中に、道徳の時間に用いられる教材の具備すべき要件が挙げられている。その要件をふまえ、さらに具体的に以下の 6 つの要件を具備する教材を選択することで、児童が学習に意欲的に取り組み、学習への充実感を持ち、道徳的価値の自覚を深めることができると示されている（表 6）。

表 6 道徳の時間に生かす教材として、選択する際の具備する教材の要件

- ア 児童の感性に訴え、感動を覚えるようなもの。
- イ 人間の弱さやもろさに向き合い、生きる喜びや勇気を与えてくれるもの。
- ウ 生や死の問題、先人が残した生き方の知恵など人間としてよりよく生きることを意味を深く考えさせるもの。
- エ 体験活動や日常生活等を振り返り、道徳的価値の意義や大切さを考えることができるもの。
- オ 悩みや葛藤等の心の揺れ、人間関係の理解等の課題について深く考えることができるもの。
- カ 多様で発展的な学習活動を可能にするもの。

その中で、「ウ 生や死の問題、先人が残した生き方の知恵など人間としてよりよく生きることを意味を深く考えさせることのできる資料」の要件から、下記の資料を選定した。（表 7）

表 7 選定した資料

内容項目	資料名	内 容	ねらい
生命尊重 3－（2）	「電池が切れるまで」 —みんなで考える道徳— （日本標準）	小児ガンのためにこの世を去った一人の少女の生き方についてのドキュメンタリーをもとにした資料である。近づく死を覚悟しながらも、一生懸命生きる姿が書かれている。	生きたくても生きられない命があることを知るとともに、命を大切にしようとする心情を養う。
生命尊重 3－（2）	「人間愛の金メダル」 —ゆたかな心で— —どうとく— （文溪堂）	東京オリンピックのヨットレースで、実体験に基づいた資料である。競技の途中で先頭のチームの一人が海に転落する。レースを続けるか、人の命を救うのか迷うが、海に落ちた選手を必死になって救うという感動的な話である。	生命の尊さを感じ取り、生命あるものを大切にしようとする心情を育て、自己の生き方を考える。

上記 2 つの資料は、実話に基づいた資料である。実話を活用する事は、子どもたちにとって真実味があり深く考えていく教材になると思われる。

資料「電池がきれるまで」は、主人公が小児ガンのために 10 才という若さで亡くなる。本学級の児童と年齢が近く、身近かに感じる事が出来る資料であると考え。「命は大切なものだ」と頭では分かっている、普段の学校生活の様子を観察すると、「命」を軽視する言動が見られる。実

際、本学級は、他のクラスと比較して、内科的、外科的疾患が多いと言われている。児童に、生きてくても生きられない命があること、また、最後まであきらめず病氣と闘い、精一杯生きた主人公に共感をさせることで、「命」の大切さについて深く考えることが出来ると考える。

資料「人間愛の金メダル」は、金メダルを目前にして、海に落ちたライバルを救う話で、子どもたちにとってイメージしやすい教材である。オリンピックで金メダルをとることが容易ではない事を子どもたちは知っている。金メダルを目指し練習に励んできた選手が、金メダルにもうすぐ手が届きそうなとき、他の人の命を優先する。その選手の行動を通して、命の尊さに気付かせたい。

本学級は、10月の運動会のリレーで一位をめざし、7月から体育の時間にバトンパスの練習を何度も繰り返し、練習に励んできた。しかし、本番では一人の女の子が転倒するアクシデントがおり、一位にはなれなかった。このような身近な出来事と関連づけて指導を展開することで、主人公に共感できるのではないかと考える。

検証授業①では、「自分の命」に視点をあて、命を大切にしようとする心情を育てたい。検証授業②では、「他の人の命」と観点を変えて授業を展開することで、「生命尊重の心」を育て、自己の生き方について考えさせたい。

② 資料の提示について

資料「電池がきれるまで」について、今回は、少女の写真と詩を活用する。読み物資料は活用せず、主人公を年齢ごとに追って説明し、児童に考えさせたい場面の項目を黒板に書きこんでいく。これは、授業に対する期待感を高め、話の展開を自分の経験と照らし合わせ考えさせるためである。また、資料「人間愛の金メダル」については、資料を分割して提示する。話の主題に迫る場面までを児童に配布し、続きを知りたいという資料に対して関心を持たせ、次の発問につなげていきたい。

③ 発問について

教育においては、学びの過程（プロセス）での問いを意図的に構成し、子どもに「問いと答えの間を十分に学ばせる」事が重要であると言われている。これまでの授業を振り返ると、子どもたちの発言を上手に引き出すことが出来ず、一方的に教師の考えを伝達する結果になっていた。

教師による発問は、児童の思考や話し合いを深める重要な鍵となる。発問によって児童の問題意識や疑問などが生み出され、多様な感じ方や考え方が引き出される。そのために、児童の思考の流れを予想し、それにそった発問や、考える必然性や切実感のある発問、自由な思考を促す発問などを心がける。

本研究では、授業の中で、資料を通して、子どもたちが互いの考えを聞き合い、学び合いが豊かになることで、自分自身を見つめ直すことができるような発問にしていきたい。

④ 書く活動について

解説「道徳編」第5章の「道徳の時間に生かす指導方法の工夫」にも、書く活動の重要性を挙げている。永田繁雄(2005)は、道徳教育における書く活動の意義について表8のことを挙げ、道徳の時間で子どもが自己と対峙して書くことは、生きることの感じ方、考え方を豊かにしていくことであり、自分らしい生き方や夢、あこがれに目を開き、それを自分の心に刻み込んでいくことでもあると説明している。さらに「資料や話し合いに感動し、考えや心情が深まれば深まるほど、子どもは自分自身を率直に見つめ語ることができるようになるはずである。」と述べている。そのため、授業では、ワークシートの工夫をし、自分の考えを書く活動を、意図的に取り入れていきたい。

表8 道徳教育における「書く活動」の意義

- ・ 自己を集中して見つめる場になる。
- ・ 自分の感じ方や考え方が明確になる。
- ・ 発表したいことを吟味、再構成できる。
- ・ 相互に見合い、学び合いが豊かになる。
- ・ 考え方の変化等の自己評価に生かすことができる。
- ・ 発表は苦手でも書くことが得意な子どもにとって表現が一層促される。
- ・ 書くことで開放感を味わう。

Ⅲ 指導の実際

1 検証授業 (3 学年)

(1) 主題名 かけがえのない命 内容項目 3－(2) (生命尊重)

(2) 資料名 「人間愛の金メダル」 出典 文溪堂

(3) 本時のねらい

生命の尊さを感じ取り、生命あるものを大切にしようとする心情を育て、自己の生き方を考える。

(4) 授業仮説

価値の把握から主体的な自覚の場面において、ワークシートを活用し、じっくり考えさせることによって、生命を大切にすることの心情が育ち自己の生き方を考えることができるであろう。

(5) 展開

展開	学習活動と発問	予想される発言	教師の働きかけ
導入 (5分)	1, オリンピックについて考える。 ○オリンピックに出場するために、選手はどのような努力をするだろう。	・毎日、練習する。 ・苦しい練習。	○北島康介、浅田真央の写真を提示する。 オリンピックについて触れ、オリンピック出場には、大変な努力が必要であること、その中で、金メダルを取ることがいかに難しく、尊いことか押さえ、資料への関心を高める。
展開 (35分)	2, 資料「人間愛の金メダル」を読んで話し合う。 ○ヨットレースが始まった時、キエル兄弟はどんなことを思っていたか。 ○オーストラリア選手に気付いたキエル兄弟は、どんなことを考えたでしょう。 ○キエル兄弟はどうしたと思いますか。 ○レースを中断して、助けたキエル兄弟をどう思いますか。 3, 命の大切さについて考える。 ○今日の道德の授業で勉強になったことはどんなことですか。	・絶対、勝つぞ。 ・金メダルをとるぞ。 ・国の代表なんだ負けるもんか。 ・ここで止まったら、負けてしまう。 ・助けるのはおれたちの役目じゃない。 ・このままレースをしよう。 ・金メダルまでもうすぐだ。 ・このままだと死んでしまう。 ・どうすればいいんだ。 ・命が大事だ。 ・助ける。 「金メダルよりも命が大切だから」。 ・「たとえ金メダルを取っても、ウィンター選手が死んだらうれしくない。」 ・助けない 「金メダルがどうしてもほしいから」。 ・すばらしい。 ・立派だ。 ・金メダルよりも他の人の命を大切にしたらえらい。 ・かっこいい。	○国の代表として、オリンピックに参加していること、金メダルを必ず取るぞという強い気持ちで望んでいることに気づかせる。 ○本時の中心場面である。人間誰しも弱い心がある。キエル兄弟の迷いに共感させる。 ○キエル兄弟は、オーストラリアの選手を助けるか助けないかそれぞれの立場で考えさせる。また、理由を書かせることにより「もし、自分だったらどうしたか？」と発問し自己内対話を促し、ねらいとする価値に迫りたい。 ○キエル兄弟のすばらしさ、人間としての行為の美しさを理解させる。 ○命の大切さについて考える機会は少ない。一人一人じっくり考えさせたい。
終末 (5分)	4, 教師の説話を聞く。		○運動会のリレー競争の話をする。転んでも最後まで懸命に走ること、相手に優しい言葉かけをすることも命を大切にすることであることに気付かせたい。

(6) 評価

①キエル兄弟の行為を通して、生命の尊さを感じることができたか。

②キエル兄弟の行為の尊さを理解し、自己の生き方を考えることができたか。

2 研究仮説の検証

授業実践において、生命尊重の心を育て、自己の生き方を考えることができたかを検証授業①、検証授業②、行動観察、ワークシート、単元前後に実施したアンケートの結果から検証する。

(1) 検証の視点1：検証授業①で効果的な資料選定、提示、発問を工夫し、自己を見つめさせるための書く活動を取り入れることにより、生命を尊重する心情を育てることができたか。

① 資料の選定と提示の工夫

授業前のアンケートで、「命を大切にしなければならないと思いますか」という、質問に対し、ほとんどの児童が「とてもそう思う」と答えていたが、中には、「全く思わない」という児童が3%いた。「自分や周りの人の命を大事にしていこうと思いますか」の質問では、「とてもそう思う」が91%で、「まあまあ思う」が9%だった。

また、11月までの保健室利用状況を見ると、本学級は、内科的・外科的疾患で保健室利用が学年で一番多い事が分かった。命は大切だと頭では理解しているが、それを心で感じとり、生活の中で生かしていこうという行動の面が不十分であると考えた。そこで、子どもたちの感性を揺り動かし、感動を与える資料として、実話資料である、「電池が切れるまで」を選定した。主人公が10才で、児童と年齢も近く、また実話だということで、児童は関心を持つだろうと考えた。さらに、怪我やすぐ不調を訴える児童に、主人公の生きかたを通して、自分自身を見つめさせる機会となるだろうと考えた。授業の展開は、資料を読ませず、教師の語りで進めていったが、児童は最後まで集中して聞いていた。

提示の工夫として、これまでの授業実践においては、すぐに読み物資料に入り、話の流れにそって考えていく展開であった。そのため、主人公を深く見つめる事が出来ず、深まりのない授業だったのではないかと考えた。そこで、本授業では、資料との対話を通し、まず、主人公へ興味関心を持たせ、主人公に対して、イメージをふくらませたいと考え、一枚の写真を提示し授業を展開した。ワークシートを見ると、「なんでおなかをつかんでいるの?」「なんでバンダナをしているの?」「病気の?」と児童が主人公について、自分なりにイメージしていることが分かる。このことから、一枚の写真提示の仕方は、児童に資料に対する興味や関心をもたせる上で効果があったと考える。「おなかをつかむ」「バンダナ」という児童の気付きは、授業の見通しをもたせるに効果的だった。また、「何で笑っているの?」の疑問は、展開後段の主人公の生き方を考える上で大いに役立った。前段後半に、女の子の死を伝えず、詩「電池が切れるまで」を黒板掲示した。「女の子はどうなったの?」「亡くなったの?」と児童のつぶやきからも、この提示の仕方が、児童にその後の主人公についてイメージさせる上で効果的であったと考える。

② 発問、書く活動の工夫

発問の工夫として、導入で、学級の4月からの校内での怪我や病気のデーターを提示し、「この数字は何だと思いますか。」と発問した。児童からは、「人の数?」「忘れ物の数?」など、多くの意見が出た。学級の内科的、外科的疾患であり、また、学年で一番多いのに驚く声が聞こえた。これからの授業の見通しを持ち、道徳的価値の自覚に向けて効果的な動機付けだったと考える。

これまでの授業実践においては、教師から児童、児童から教師というパターンの授業形態で、発問に対し児童からの考えをそのつど黒板に書き込んでいった。そのため発言する児童が限られ、特定の児童が中心となり授業が展開しがちであった。そこで、児童から児童へと話し合いが続き交流することで、価値の追求、把握をさせたいと考えた。そのため、どの子も価値について自分なりに考えることがしやすい発問を心がけた。展開後段で、中心発問「もし、あなたが、同じ病気になってしまったらどうしますか。」を投げかけた。「もし、自分だったら」と自分と主人公を置き換えて価値を追求させるためである。「最後まで頑張る」「頑張れないかも」「治療は、つらいからあきらめる」という声が聞かれた。

次に、児童の思考や話し合いを深めさせるためにそれぞれの児童の考えを発表させ交流させた「頑張れない」「あきらめる」という児童に対し、「あきらめたらどうなりますか?」とゆさぶり発問をした。児童から、「あきらめたら死ぬよ」という言葉が投げられ、惑う児童も見られた。表9のB児は、始め、「あきらめる」と感想を書いていたが、交流後には文を書き足していた。交流の場においては、どの児童からも、それぞれの声を聞くことが出来たので、この発問は、児童にとって主人公の生きかたに迫れる考えやすい発問だったと考える。

書く活動においては、一枚の写真を提示し、「写真から分かること、疑問に思うこと、疑問に対して予想してみてください」と質問し、ワークシートに自分の考えを書き込む活動をさせた。この活動は、中心発問につなげるような、児童の考えを期待して進めた。「病気なのになぜ、笑っているの？」の疑問は、展開後段で、女の子の生き方、「精一杯生きる」がそうさせたのだと関係付けて考える手立てになったと考える。

展開後段の振り返りの場面では、ワークシートの見出しを「手紙を書こう」にし、児童に感想を書かせた。これは、主人公への手紙という形式をとることで、主人公の生き方への思いを述べさせ、自分を振り返って欲しいという意図があった。しかし、それがうまく伝わらず、価値から離れた感想がみられた。どの児童にも、教師の意図が伝わるようなワークシートの小見出しと説明の仕方に課題が残った。表 9 は、授業後の児童の感想である。児童が資料の中の価値に気づき、主人公に共感し、自分自身を振り返る様子が分かる。

表 9 授業後の児童の感想

A児	由貴奈さんは、とてもがんばりやでえらい、わたしも由貴奈さんをみなります。がんばります。
B児	いやなことに、いっぱいたえたね。どんなことがあってもあきらめないってすごいね。僕は、あきらめるかもしれないのに。(交流後) 僕も病気にかかったらあきらめないでがんばるよ。いのちがなくなるまでがんばるよ。
C児	私も命がつかれたというまで、精一杯生きようと思います。
D児	私は、一時骨髄白血病になり、助かる可能性は5%といわれ、あきらめていましたが、ドナーさんのおかげで助かりました。由貴奈さんみたいに、命の電池が切れるまで頑張って生きます。由貴奈さんの分までがんばります。

以上の事から、効果的な資料選定、提示、発問を工夫し、自己を見つめさせるための書く活動を取り入れることにより、生命を尊重する心情を育てることができたと概ね考える。

- (2) 検証の視点 2：検証授業②で効果的な資料選定、提示、発問を工夫し、自己を見つめさせるための書く活動を取り入れることにより、自他の生命を尊重する心情を育て、自己を見つめさせることができたか。

① 資料の選定と提示の工夫

授業前のアンケートで、「友達は大切ですか」の質問に、「とてもそう思う」が90%、「まあまあ思う」が6%、「あまり思わない」が1%だった。「自分や周りの人の命を大事にしていこうと思いますか」の質問では、「とてもそう思う」が91%で、「まあまあ思う」が9%だった。しかし、「友達に対して、言葉や行動に気をつけようと思いますか」の質問では、「とてもそう思う」が46%、「まあまあ思う」が34%、「あまり思わない」が7%、「まったく思わない」が13%もいた。

そこで、生命あるものすべてを大切にしようとする心を育てたいと思い、第二次では、他の人の命に視点をあてた、実話資料「人間愛の金メダル」を選定した。この資料は、金メダルを目の前にして、人の命を救う話である。登場人物の迷いや弱さ、葛藤場面があり、また、児童にとってもイメージしやすいものだと考えた。また、本学級での10月の運動会のリレーでの出来事と関連づけて指導をすることで、道徳性が高められるのではないかと考えた。北京オリンピックの金メダリストの北島康介は知名度が高く、また、2月にバンクーバーオリンピックが開催されるということもあり、ほとんどの児童が関心を持ち授業に参加していた。また、授業後のアンケート「命を大切にすることはどんなことですか。」の質問に、「やさしい言葉をかける」「嫌がることをしない」などの考えがあることから、この資料は効果的だったと考える。

提示の工夫として、これまでの授業実践においては、最初に「題材」を提示し、次に資料を見せ、資料を読み進めながら、主人公のとった行動やその理由などについて考えさせていた。本授業では、まず、「オリンピック」という言葉を提示し、考えさせる活動から始めた。活発な意見があり授業の動機付けとして効果があったと考える。また、資料は、競技が始まり、主人公がもうすぐ首位になりそうなところで、先頭グループの選手が一人転倒し、主人公が助ける、助けないの葛藤する場面までを分割提示した。これは、次の発問につなげるための工夫である。児童は続きが気になる様子で、「続きは？」というつぶやきが聞こえてきた。分割という方法は、児童の感心を引くには、効果

的だといえる。

② 発問、書く活動の工夫

発問の工夫として、まず、「オリンピックについて何か知っていますか?」「オリンピックに出場するためにどのような努力をしますか?」と発問した。この発問は、オリンピック出場には、大変な努力が必要であること、その中で、金メダルを取ることがいかに難しく尊いことか押さえることで資料に対して関心を高めるためである。「野球」「スケート」「せいっぱい」「頑張る」「苦しい練習」など声が聞こえ、中には、金メダリストの発した有名な台詞を言う児童もいた。

このように、「オリンピック」について考えさせることで、授業に対し見通しがもて、関心をもって資料に入ることができ、分割提示の後の中心発問につなげることができた。

書く活動は、中心発問「この後、キエル兄弟はどうしたと思いますか?」の後に取り入れた。キエル兄弟の行動となぜそうしたのか理由も書かせるようにした。理由を書かせることにより、「自分ならどうするのだろう。」とキエル兄弟と自分自身を照らし合わせ考えを深めさせるようにつとめた。ワークシートを見ると、どの児童も自分なりの考えをしっかりと書いていた。違う意見を聞きあい交流させる予定だったが、全員が「助ける」と言い、「金メダルは、次にとればいい」という考えが多くみられた。そこで、ゆさぶり発問として、「次のオリンピックに出るチャンス、そして、金メダルを取るチャンスはありますか?」と投げかけた。しかし、児童の考えは変わらないように感じられた。展開後段では、「キエル兄弟をどう思いますか?」と発問に「かつこいい」「やさしい」「すごい」「人間としての金メダル」というキエル兄弟の生きかたに感動する声が聞かれた。振り返りのワークシーの小見出しは、前回の反省を踏まえ、「学んだ事をかきましよう」に変え書かせた。書く活動の苦手な児童も自分の考えをしっかりと書いていた。以上の事から、これらの発問や書く活動が効果的であったと考える。表 10 は、授業後の児童の感想である。

表 10 授業後の児童の感想

A児	わたしも思いやりのある心をもちたいなあと思いました。
B児	命より価値があるものはない。いいことをしたら、いいことが起きる。命は世界で一番大切なもの、どんなにいい人でも、人があぶないのにほっといたら心はさいていの人になる。
C児	金メダルよりも大切なものは、命だということがわかりました。人のえがおやさしさが本当の金メダル。
D児	たとえライバルでも助ける。物より命が大切ということ。

(3) 検証の視点3：検証授業

①と②で効果的な資料選定、提示、発問を工夫し、自己を見つめさせるための書く活動を取り入れることにより、自他の生命を尊重する心情を育て、自己を見つめさせることができたか。

① 授業前後の実態調査の結果より

授業の前後で、児童に命についての意識調査アンケートを実施した。表 11 を見ると「むだにしない」「まさるものはない」等、また、「お母さんが命をかけて生んでくれたのだから」という考えもあり、命についてより考えが深まったと考える。表 12 の E, F, G, H児は「命を大切にするととはどんなことですか」の質問に対して、授業前は無解答だった。授業後は、「命を大切にすること」について、具体的に考えるようになっている。

図 1, 2 からわかるように、「友達は大切ですか」「友達に対して、言葉や行動に気をつけよ

表 11「なぜ命を大切にしなければならないと思いますか?」の授業前後の比較

	<従業前>	<授業後>
A児	命は神様に与えられて時間も限られているから。	命は神様からやっもらえたものだからそれをむだにしたら <u>もったいない</u> 。
B児	命がないと死ぬから。	命に <u>まさるものはない</u> 。
C児	命は一つしかないから。	命がないと人は <u>生きていけない</u> 。
D児	命は一つしかないものだから。	命は <u>一度きり</u> だから。

表 12 「いのち」を大切にするととはどんなことですか。

E児	最後まで生きること
F児	いかのおすしを守る。 病気になるようにする。 てあらいがいをする。
G児	自分の体を守る。 きけんにあわないようにする
H児	うがいや手洗いをする。 早寝早起き朝ごはん。

うと思いますか」についても、「とても思う」が全体的に増えている。図2で「まったく思わない。」と答えている児童は、事前では、「まあまあ思う。」と回答していた児童である。そのことについては、今後も見守り、「心のノート」の活用を通して、支援するように心がけていきたい。このように、検証授業①と②で効果的な資料選定、提示、発問を工夫し、自己を見つめさせるための書く活動を取り入れることにより、自他の生命を尊重する心情を育て、自己を見つめさせることができたと考える。

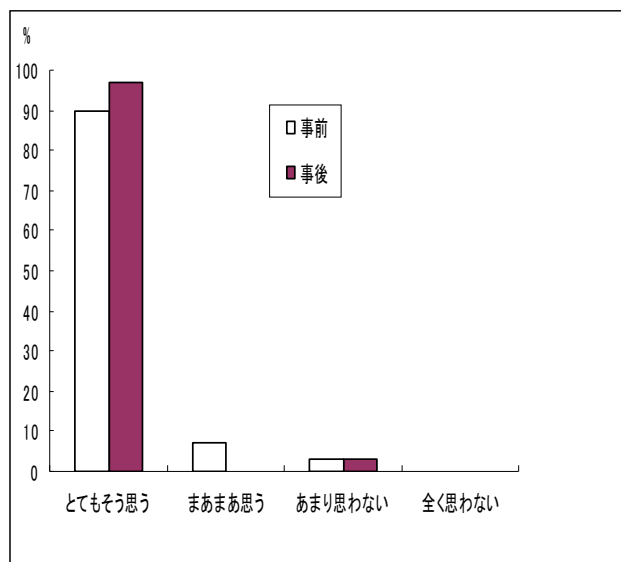


図1 「友達大切ですか。」

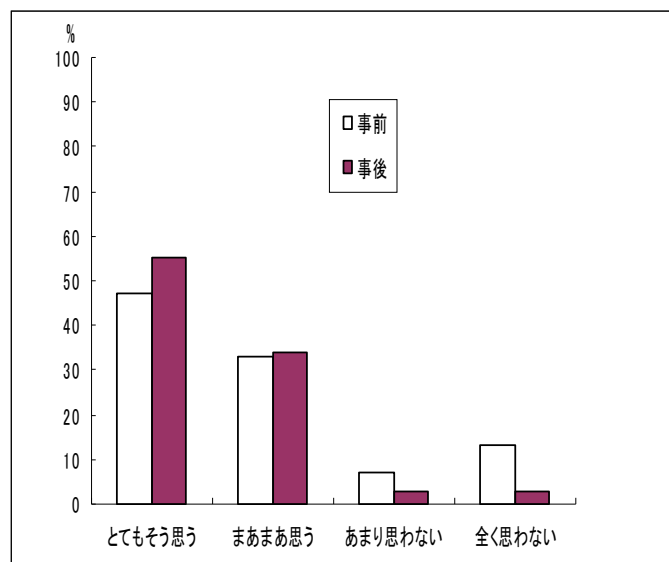


図2 「友達に対して、言葉や行動に気をつけようと思いますか。」

IV まとめと今後の課題

本研究は、「生命尊重の心を育て自己の生き方を考える道徳の時間」をテーマに、道徳の時間が子どもたちの心に響く授業になるよう、資料選定、提示の工夫、発問の工夫、書く活動を取り入れ、生命尊重の心を育て、自己の生き方について考えさせたいと進めてきた。その成果と課題をまとめる。

1 成果

- (1) 心に響く資料の選定や提示、発問、書く活動を取り入れることにより、生命尊重の心を育てることができたと思われる。
- (2) 価値項目「生命尊重」を自分の命と他の人の命と視点を変えて、授業を展開することで、自他の生命尊重を育み、自己の生き方を見つめ、よりよく生きようとする道徳的实践意欲を高めることができたと思われる。

2 課題

- (1) 授業展開を進めていく上で、他者（資料、仲間、心）との対話を取り入れ、価値意識がより高まるような授業工夫の改善が必要である。
- (2) 自己の生き方についての考えを深めさせるために、効果的な書く活動を取り入れた授業の工夫が必要である。
- (3) 児童一人一人が、自己を振り返り、道徳的实践力が育まれるように、心のノートや個別ファイルの継続的な活用が必要である。

<主な参考文献>

- 吉浜幸雄 2010 『豊かな学びを育てる授業』 未来企画印刷
 島袋孝治 2009 『沖縄県立総合教育センター 後期長期研修員 第45集 研究集録』
 文部科学省 2008 『小学校学習指導要領解説 (平成20年8月)道徳編』 東洋館出版社